

祈祷の一考察

—『六大新報』における祈祷議論を題材として—

金本拓士

はじめに

平成二十一年は、昨年からの大不況の影響か、神社仏閣に初詣した人数は記録的に多かつたようである。

「困った時の神頼み」と言われるように、わたしたちは、自分の努力ではどうにもならないとき、ついつい手を合わせてしまう。これはどんなに文明が発達しようとも、決して変わらない行為である。それは普段から無宗教、無信心であつてもである。では、祈れば必ず救われる。ということも心の底から信じている人間はどれぐらいいるであろうか。初詣に行く多くの人は、明治神宮を信心しているからでも、成田のお不動さんを熱烈に信仰しているわけでもなく、ただなんとなくご利益がありそうだから、と軽い気持ちでお参りしているのではなからうか。

祈祷の一考察

では、わたしたち僧侶は、祈祷をすることにどれほどの自信をもつて勤めを行っているのでしょうか。多くの参詣者がお参りするような寺院では、一日に何座も護摩修行を勤め、それがだんだんと機械的作業のようになっ

てはいないだろうか。

真言宗にとって祈禱を行うことは大変重要な儀礼である。わたしたちは当たり前のように行っている祈禱というものの、その意義、あり方についてあらためて考えていく必要があるだろう。

ところで、この祈禱について、大正になって宗教新聞『六大新報』上で当代一流の真言宗の学匠が議論をしたことがあった。

その議論のきっかけとなったのは、明治天皇崩御（一九一二年七月三十日）であった。明治天皇の体調不調が世に伝えられるや、各宗教関係者は天皇回復を願って一斉に祈禱に勤めはじめた。（『六大新報 四百六十一号 明治四十五年七月二十八日』）しかし、数日後天皇が崩御されるや、世間は祈禱などしても、天皇の御病気が平癒されなかつたのではないか。祈禱は迷信であるという批判が出てきたのである。

天皇、皇族の病氣平癒に対して祈禱を行うことは、昔からあったことである。だが、祈禱の問題が持ち上がったのは、やはり明治維新になり、西洋から近代文明が流入され、江戸時代までの古い価値観が否定されていく状況であったからであろう。また明治天皇という存在は、まさに古い日本から新しい日本に生まれ変わった象徴であり、その天皇に対して、ある意味古い価値観の代表である祈禱を行うということに世間の風当たりも強かつたのではなからうか。

このような状況の中でやりとりされた祈禱議論は、本文で示したように、祈禱に対する科学的根拠を説明する立場ではなく、あくまでも真言宗僧侶として祈禱の正統性を訴えているものであり、また他宗の祈禱を批判するものではない。それは一つは祈禱の有効性について、そしてもう一つは祈禱を行う真言行者のあり方を中心に議論が展開されている。

我々はこの『六大新報』でやりとりされた祈禱論をあらためて見直すことで、現代を生きる我々が何故祈禱をしなければならないのか、それを考えるきっかけとなるであろう。

祈禱迷信の主張

『六大新報』での議論を出す前に、明治天皇崩御に際して書かれた祈禱を迷信とする記事をあげておく。なぜならば、恐らく以下に示す記事内容がきっかけとなって、祈禱についての議論が始まったように伺えるからである。

先帝重態なりとの報傳はるや、六千萬の同胞は赤誠を凝らして御平癒を祈れり。就中祈禱の利益を説く迷信者は、此時こそと種々の形式を以て、狂するが如き熱禱を神佛に捧げたり。而して名医の靈業も億兆の祈念も何等の効を奏せず。聖天子は遂に龍馭上天あらせられき。・・・祈禱なるものが病氣平癒、起死回生、その他人生に効力ありとすれば、這般程その実証を顕著ならしむる好機会なかりしならん。従つて事實之に反するとすれば、祈禱を以て迷信にして無効力、無価値、徒為すにして虚偽なりとの我等の主張は、論を俟たずして証明せられたるものにあらずや。・・・仏教各宗中、浄土宗にては芝増上寺黒本尊前に於てし、京都知恩院に於てし、・・・真言宗にては湯島の靈雲寺大護摩を、護国寺にて普賢延命法といふ祈禱を修行せり、此外京都の東寺、延暦寺、泉涌寺、曹洞宗本山総持寺、永平寺、日蓮宗各派皆御悩平癒玉体安穩の祈禱をなせり。・・・何千萬回の口呪護摩を以てしても、名国手一服の投薬にだも値するものにあらず。而して世の祈禱の靈験を説くもの、医薬の効能、若しくは偶然何等かの原因によりて幸に病氣の一時たりとも快復することあれば、是れ

即ち祈祷の効驗なりとて、世の愚昧者を迷信の府に誘拐す。其事や悪魔の所為に比すべし。土屋極東「明治天皇の登遐と祈祷の効力」〔新佛教二六四～二六五頁〕

祈祷の宗教に於ける価値は、一言にしていへば唯是れ感情の満足なり、発言なり。因果の關係や、理性の判断から見れば、価値あるものにあらず。従て祈祷を専らにする宗教は、浅薄の宗教なりといふ結論に到着すべし。拓殖秋畝「祈祷の教育に及す影響」〔新佛教二六六頁〕

これら二つの記事で書かれているように、祈祷という宗教行為自体が迷信、あるいは世間をたぶらかす悪魔の所為として、そこに何ら好意的な見方をしていないことがわかる。この記事が書かれた時期は、明治維新からすでに四十五年以上もたっており、その頃では宗教で行われる儀礼行為という前近代的なものをすべて否定している。

真言宗の中で、みずからが実践している祈祷という行為が迷信として片付けられようとしている状況で、真言宗僧侶としてそこにある種の危機感を覚えたのであるう。

祈祷論の発端

前述したように明治になり、宗教者の祈祷行為について批判的な声があげられる中であって、『六大新報』紙上に、次のような記事が掲載された。

ご祈祷について

土宜大僧正談

先帝の御不例については上下何れも至誠を凝らして御平癒を祈らぬものはなかったにも拘わらず、終に御崩御遊ばされて了った。こゝに於いて祈祷の功德を疑ふものが出て来て、祈祷が利くものなら此度位多くの人が一心に祈つて利かぬことはない筈である、然るにそれが利かなかつた所を見ると神も佛もないものか杯と飛んでもない邪見を起すものが世間には少なくないらしい、そこで記者は一日御室山に参殿し猊下にお目にかゝりて談偶そのことに及ぶや猊下は最も明快適切に左の如く御垂示があつた。

祈祷は満業を轉ずるのであつて引業を轉ずるのではない、既に決まつて居るものを動かさんとするは無理である、無理な願ひを佛天に強いるはそれはいけないことである、生れたものは死ぬと決まつて居る、死ぬといふことは天地自然の道である、新陳代謝は不可抗の法則である、これを枉げて死なぬやうにしやうとするのは道にはずれて居る、その道にはずれたことを佛天に祈るは佛天を困らせるといふものである。然らば祈祷しても何んの効もないものかといふにそれは効験がある、あることはあるけれどもどんなことでも無限に効験があるものではない、例せば注射や激薬の力で死ぬと決つて居るものでも半日や一日は死を延ばすことができるやうなもので、祈祷の力によりて三日や四日は命を長らへることはできる、けれどもそれは無理を強ふるわけだからよし延寿はできても當人は非常に苦しく、又佛天の方にも非常に困られるやうである、そして延壽したからとて十年も二十年も活きられるわけのものではない、大抵は三四日活きて居つて再び死んで仕舞ふやうである。．．．

祈りさへすれば利くといふやな極端ないひ方をしてはいかぬ、若しさういふことをいふ時は瓜の蔓に茄子を

ならせたり我等の身體ですぐ空中を飛び回ったり、・・・若しそれができたら宇宙の法則は滅茶苦茶になる。・・・そこで祈祷には二つの意味があることを忘れてはならぬ、一は正しい精神より起る祈祷でなければならぬといふこと、二は修力の修養を積まねばならぬといふこと、この二つが揃はなければならぬと同時に今一つの大慈な心得がある、それは引業はどうしても動かすことはできぬといふことである、祈祷の力によりて動かすことのできる範囲は満業についていふのである。(六大新報四百六十四号大正元年八月十八日十頁)

この記事は、『六大新報』の執筆者(蓮生観善)が、祈祷無効論をとこなえる世間の批判に対して、当時一流の学匠であつた土宜法龍に質問したことに対する返答を掲載したものである。

土宜法龍は、佐伯旭雅等に伝統的な宗学を学ぶとともに、慶應義塾大学において近代的な学問を修めている。また西洋にも遊学をし、その際南方熊楠とも親交を結び書簡のやり取りをしていたことで有名である。

伝統的な佛教の素養と共に近代的学問を身につけ、さらに御室派の管長という立場にある土宜らしい、祈祷萬能論を説くでもなく、また全否定をすることもない説明をしている。その中で祈祷の効果を説明する際、引業・満業という考え方を持ち出しているのは、伝統的な佛教教理をしつかり身につけた土宜ならではの説明であろう。祈祷についての効果を業論によって説明しているのは、後の仏教学者の中にも見受けられない。

引業・満業について

ここで引業・満業について説明を加えておく。なぜならば、この業論が後の議論のきつかけとなるからである。引業・満業について『織田佛教辞典』で引いてみると「凡そ人間一生中善悪邪正の種々の業を造る中に、最も

主要なるもの唯一業ありて、未来世の鬼畜人天等の生を招引するものを引業と名け、その他の一切の諸業相倚て彼の鬼畜人天等の生の中に於て更に六根の具不、身体の強弱、寿命の長短、その他貧富貴賤等各自に差別する果報を円満せしむる者を満業と云ふ」と説明している。また『阿毘達磨俱舍論』ではこれを「譬えば畫師の先づ一色を以て其の形状を圖し後に衆彩を填つるが如し。」(俱舍論七三二頁)と表現しているように、人とか、猿とか、あるいは犬、魚など類(衆同分)という形状の輪郭を描くことが引業であり、その輪郭に太つているとかやせているとか、容姿端麗などの特徴でもって彩色することが満業であるとす。

以上のことから、土宜法龍は祈祷の効力というものは、太陽が西から東へと逆に登るようなあり得ない結果を及ぼすようなことはない。治る可能性のある病氣などに対してのみ祈祷の力の効力があると考えているようである。つまり、明治天皇が崩御するということは、引業の結果であり、祈祷をすることによって、いくらか延命されるかもしれないが、崩御されることに対する運命は変えようがないということを主張した。

土宜法龍説に対する反論

土宜法龍の引業・満業という祈祷限界論に対して、密教の祈祷萬能論の立場からの反論が、次の『六六新報』紙に出された。執筆したのは和田大圓僧正。和田大圓は真言宗勸修寺の門跡であり、また当時真言宗内一番の布教師であった。

密教の御祈祷に就いて

密教には息災法、増益法、敬愛法、調伏法、鉤召法、滅罪法等いろいろありて何れも現世現在に在りて仏陀

の大威神力と修行者の功德力と法界平等無碍の増上力とに依りて効験感応を實現實得せしむる法なり。去乍修する所の行者又は施主等に於て信念なく、法の如く修せざれば、是れ三方の中の一力又は二力を闕如するものにて佛陀加被の一力のみにては効験感応無きは経軌の御示しなり。特に先帝の御不例御惱中、国民僧俗男女の赤き心より神明や佛陀に御平癒を祈祷したることは真宗の信仰者を除き其他恐らくは十中の九人半又は十人が十人迄ならん。然るに一向何等の効験なく、終に神去りましたるは祈祷法の効能なきやなど、多くの人の中には愚痴をこぼす者もあらむ。之れにつき予は左の如く言はん、国民の多くの者の赤き心より祈祷せしは元より神明佛陀の納受ましませしは疑ひなし、或は幾日か幾時かの御報命を「のぼし」奉りしならむ。又玉體の御苦痛も幾分か御軽減ありしならん、若し国民多数の者に赤き心なく、神明佛陀に祈祷するの誠意なく、又神明や佛陀の加被なきものとせば、或は神退増す日時も疾く、又五体の御苦痛も多大なりしかも計り難しと思ふ、…：法験の乏しきは、佛辺の法に罪あるに非ず、修行せし人や施主、願主の不徳不誠実を慚愧するの外なし。其故は昔の大徳高僧勅を奉じて法を修し直に法験の実現せし例証は多々あり、例せば病人を療する医師が拙なければ、如何なる良薬も病を治する薬劑師や、病を診断する医師の良否に在るが如し、呉々も神明や佛陀を恨み怨み…：又祈祷法の無能無功力を罵るべからず、要は国民…：修行者…：施主…：信者等の不徳又は誠意に於いて欠け、至らざる所ありしならんと自己銘々に反省し恥入るの外なし。衆生の業力を転換することは、頭教の大乗諸宗にも一分は許す…：轉重輕受と申す熟語もあり…：孟蘭盆経に於ける目蓮の母の因縁や又法花経等にも往々説示されたり、元より定業をも法力佛力に依りて転換する訳けにて不定業には局らず、又満業（別報業のこと）のみには非ず、牽引業（生死を潤す業のこと）即ち総報業をも法力や佛力にて（一分に）定まれる業をも転換するなり。乍去（全分に）現世現在の一刹那引業にも又は満業も別報業も総報業も如何なる決定業も、

佛陀果上の妙法力等の三力具足の宿縁開發……値遇密教の時は速疾に轉換除滅するは独り密教最上の佛地の三味道のみなり。……光明真言の中の一句「ハラバリタヤ」は引業も満業も総別二業の罪業も轉換改易して善果福業を獲得せしむるの呪なり。又一座の行法中には、召罪、摧罪、業障除等の真言や印もあり、之れ何れも引業も満業も総報業も別報業も共に除滅消滅せしむるの三摩地法なり。（六大新報 四百六十七号 大正元年九月三頁）

ここで和田は、天皇が亡くなったのは、祈祷に効果がないのではなく、祈る立場の者が至らなかつたために、つまり祈り方が良くなかつたので天皇が崩御したのであると主張する。それは、三力偈で言うところの、行者の功德力、法界の増上力がなければ、たとえ如来の加被力のみでは効験感応が無いとし、佛陀の法がまちがっているのではなく、祈祷を修する行者、願いを頼んだ施主の徳が足らなかつたことであるとするとする。

そして正しい祈祷するならば、譬え引業であつてもその運命を変えることができるかと主張する。また、孟蘭盆経で目蓮の母が救われることや、法華経の龍女が男子に変わつて成仏することを掲げ、さらに光明真言は引業、満業の罪業さえも轉換して善果を轉換する呪文であることから、密教の修法は「引業も満業も総報業も別報業も共に除滅消滅せしむるの三摩地法」であると考える。つまり、密教における祈祷そのものにまちがいはなく、祈祷に力がなかつたのは、拜む人間の方に問題があるからだと結論する。

その他学匠の見解

先の記事が掲載された後、当時の真言宗における学匠たちが、同じ六大紙上において祈祷について各々の見解

を示した。

代表的な名前を挙げるならば、権田雷斧、長谷寶秀等である。

彼らの見解は、大体において土宜、和田両者の主張に準じ、あるいは折衷するような立場で論じている。

新義真言宗の学匠である権田雷斧（六大新報 四百六十九号 大正元年九月二十二日三〜四頁）は、はじめに「真言宗の祈祷は法身如来の三密を以て加持するのであるから断じて顕著なる法験はあるべきである。」として、法験を顕すためには、「三摩地の法力と行者の道力」とが備わっていることが必要であると説く。

権田が言うところの「道力」とは「戒定慧の三学を兼修すると共に真正なる信念に依つて」得られるものであり、「法力」は「十方に周遍し三世を該羅して平等に千古不変」であるとする。つまり祈祷の力の違いは道力によるものであるとする。また権田は、「真言宗中に於て戒定慧の三学を遺憾なき迄に嚴修し真正の信念を修養しある真実の阿闍梨を認識することが出来ぬ故に道力は頗る闕乏してをると思ふ。かく道力は闕乏して法力と期待する能はず作法も亦多少の誤謬ありとすれば之れを修行すれども祈祷の法験威力の顕著に現前せざるは当然のことである。法力と道力と融合すれば必ず祈祷の悉地は現前す。」と説明して、明治天皇が崩御されたのは、「御定命」と信じながらも、もし「東密台密の中に道力堅固なる阿闍梨」がいて加持祈念するならば、一回は病気が平癒するであろうと感想を述べている。

また引業満業の見解については、「三密加持力と雖も因果の真理を左右し得るものではない故に不定業及び異熟生のものは之れを転ずることを得れども決定業及び真の異熟を転ずることは出来ぬのである佛陀の三不能の中の定業不能轉は此れである。」と述べ、定められた業については転換することができないとし、土宜法龍の説を支持しているが、一方では「觀行の力に依て決定業に対して轉重輕受し或は延長し或は短縮することを得る」と、

和田の祈禱万能論まではいかないが、ある程度の効果を得ることができると論じている。

次に長谷寶秀（六大新報 四百七十号 大正元年九月二十九日 十一〜十二頁）の主張を見てみるならば、まず祈禱について「祈禱といふことは先づ其目的と本尊とを定めて之に對して秘法を修するのである。本宗の者は即身成仏を目的とするものであるから一切の祈禱も此根本義諦の因となるものであらう。」と述べ、真言宗の祈禱とは即身成仏を目的とすることを根本しなければならないとする。その上で「真言行者が祈禱をするには六大圓融、依正一如の觀に住して三密の秘法を修すれば所求所願を成就することが出来ると思ふ秘密の法門より言へば決定業をも轉ずることは出来る筈である。之には行者三密の觀行が相應せねばならぬ。」と真言業者の祈禱は決定業さえも轉換する力があると主張し、なおかつその際、行者はよく三密の觀行が備わっていないなければならないとする。

祈禱の効力については「而し祈禱は非理非法のことを願ふべきではない。吾々の現身の壽命の如きを無限に延すことは不可能である。」と述べて、祈禱にも限度があることを認めている。そして最後に長谷は、祈禱を行う態度として、「吾々は病氣の時なども快復を祈ると共に乃至無上菩提を成就するやうに念ずべきである。」として、祈禱によつて現世利益を求めると同時に無上菩提、すなわち即身成仏を求めらるることに勤めなければならないとする。

その他『六大新報』紙上において、宮崎忍海（六大新報 四百六十八号 大正元年九月十五日七〜九頁）の「祈禱は決して因果の理を転ずるやうな使命を有するものではない。祈禱は仏陀の恩寵に浴して生活して居る靈的生活者の感謝の行為であらねばならぬ。」と祈禱の効力有無を論ずべきではなく、また真言宗の祈禱とは「世の災難を排除し苦惱悲痛の生活より解脱すると共に、益々菩提心を培養して終には即身成仏の大覺位に到達する」こ

とにあると即身成仏を目指すためにつとめるべきであるとする意見。あるいは佐伯惠眼（六大新報四百七十号大正元年九月二十九日三（四頁）の「祈祷の効験が具体的に顕われる為には第一に行者の観念力の殊勝なるを要し、第二に祈願する事柄が善事なるを要し、第三に祈祷の利益を受けんとする願主が信心家なるか、或は社会に有用な役割を務むるべきもの」とする祈祷の力が發揮するための三つの条件を提言する意見等が掲載された。

『六大新報』紙上の祈祷論のまとめ

以上の『六大新報』に掲載された祈祷論は、土宜法龍の引業・満業による祈祷限界論から、それに反論する形での和田大圓の祈祷萬能論が掲載され、その後幾人かの祈祷論が展開された。

それらの議論をまとめる形で『六大新報』の主筆であった蓮生観善が最後に「祈祷問題の終結」という題名で巻頭論文を書いている。そこでこれまで出された意見を次のように三つにまとめている。

一は宿業標準説で祈祷の験否は引満二業の關係に依るといふのである。二は佛陀撰理説で佛が願望を叶へさせたのが可いと思召せば叶へさせて下さるが、叶へさせない方がよいと思召せば叶はないことになるといふのである。三は修力標準説で修する人の修力が足りないから験が現れないので、修力さへ圓滿して居れば如何なる願望でも達せられるといふのである。（六大新報 四百七十二号 大正元年十月十三日一（二頁））

ここで蓮生は、一つには土宜法龍の引業満業による祈祷限界説。二つには和田大圓による祈祷萬能説。そしてその間に佛陀、あるいは法に叶っているか叶っていないかによるものとする因果理法説に分類し、これらの立場は相違するように見えるが、根底の所では、萬能説であっても定業すべてを破壊するわけでもなく、限界説であってもその効果をすべて否定するわけではないとして、共に通じ合っているものであると考える。そして、それ

ぞれ出された祈祷論に共通する点として「祈祷は祈祷そのものが目的でなく、その祈祷を助縁とし方便として、未信のものは正信に、既信のものは深信に向はしめむとするのが目的であるといふこと、第二は祈祷には行者の修力を要するは勿論願主の信心及び如法の儀礼を調べねばならぬいふこと」（六大新報同）とする。

結局、蓮生は、それぞれの言い分に対して、どちらが良いかという判断をせず、両者の立場も成り立つ形でこの祈祷論議を終了している。当初の発端であるところ祈祷が効くか、効かないかの祈祷論から、最終的には、祈祷を修するという目的と、行者のあり方を述べてまとめている。そして最後に「祈祷を行うものは祈祷を透して信者に菩提心を起こさせ、又人道義に反するが如きことなからしむるやう十分に注意を要せねばならぬ。」（六大新報同）と祈祷を行う真言行者に対して、その心構えを説いて、論を終えている。

祈祷・加持・加持祈祷

以上、『六大新報』紙上に書かれた、明治から大正にかけて活躍した学匠による祈祷論を概観してきた。当時、祈祷迷信論に対して、かれらはまず真言僧侶として、祈祷を行うことの意義を説き、それが迷信ではなく真言宗教理に基づいたものであると主張していることがわかる。そして祈祷が効く効かないは別として、いかに真言僧侶として祈祷を行わなければならないかについて熱く論じていくのである。

真言僧侶にとって、祈祷を行うことは当然の修行であり、そこに何ら疑問を呈することはない。ただ、明治の近代化の流れにあつて、加持祈祷≡迷信邪教の類いと見なされてしまう世間に対して、それを科学的に効果あるものかどうか、ということ論ずるのではなく、土宜のように業論を取り上げて、祈祷の限界を主張しながら、なおかつ「一は正しい精神より起る祈祷でなければならぬといふこと、二は修力の修養を積まねばならぬ」とし

て、行者自身の心構えを説いているし、和田の祈祷萬能論においては、祈祷の修法の教義が問題ではなく、修業者自身の問題であると述べているのと共通している。それは、いわゆる拝み屋の類の俗物の祈祷ではなく、真言宗僧侶としてのあるべき「祈祷」の姿を求める意図があつたのであろう。

そもそも「祈祷」という言葉はキリスト教の祈りから、民間信仰の樹木崇拜に至るまで広範囲に使用されるものであるが、真言宗としての「祈祷」とは、まさに「加持祈祷」という言葉で理解すべきであろう。

しかしながら、「加持祈祷」という言葉は本来、弘法大師から近世に至るまで使用されてきた言葉ではないようである。宮坂宥勝師によれば、「加持祈祷」という複合語は、弘法大師空海、伝教大師最澄、興教大師覺鑊らの先徳の著作をみても全く用いておられないし、また試みに『真言宗全書四十二卷』を索引でみても、それは見当たらない。〔宮坂 三頁〕と説明しているように、本来「加持」と「祈祷」と別物であつたが、江戸時代になって、その二つの用語が密教行者、それは出家僧侶だけでなく、市中で徘徊していた山伏などを初めとする祈祷師が行うまじない行為を総称するようになった。その際使われる「加持」は、どうやら「水を加持する」あるいは「衣を加持する」、また土砂加持作法というところの加持されたところの土砂を亡者にふりかけることによって、亡者の罪業を浄める等の仏の力を物に加えることによつて、それが聖なる存在物となることから、除災招福の祈祷と同じ意味合いとして受け取られたのであろう。

だが、「加持」とは、弘法大師が『即身成仏義』で「加持とは、如来の大悲と衆生の信心とを表す。仏日の影衆生の心水に現ずるを加といひ、行者の心水よく仏日を感じるを持と名づく」と説かれているように、仏の力（加被力、あるいは威徳力）を衆生の信心が感応するあり方を言う。よつて三密加持とは仏の身・口・意の三密が行者の身・口・意と相応することであるならば、加持祈祷とは、宮崎忍海が「吾々が祈祷を為すときの根本觀念は、

吾人三業の本性と神佛覚智の功德と真如法界六大萬徳との三力感応道交するの境に到らねば駄目である。故に吾々にして淨い心から三密一如の秘觀を凝らして祈祷をすれば、盡空法界の佛菩薩降臨して吾等と衆生と加持護念し給ふのである。要するに密宗祈祷の根本義は現世の災難を排除し苦惱悲痛の生活より解脱すると共に、益々菩提心を培養して終には即身成仏の大覺位に到達するにあるのである。」〔六大新報 四六〇号掲八〜九頁〕と述べているように、真言行者は、仏との三密加持相應の関係にある時、はじめて衆生に対しての祈祷が成立し、さらにそれが機縁となつて、即身成仏に到達せしめるものでなければならぬ。

この場合、加持祈祷という言葉は、「加持」と「祈祷」との並列した言葉の組み合わせではなく、「真言行者が仏と三密加持された立場から修せられる祈祷」と考えるべきであり、その目的とするところは、除災招福だけではなく、われわれを即身成仏に導く営みであると考えるときではなからうか。

このことは、後の時代にあつて那須政隆師が「真言宗の加持祈祷は、真言理想への引入方便として施設されたものである。」〔那須三三三頁〕と考えられていることに他ならない。

加持祈祷は、真言密教の看板文句のごとく使われ、また現在祈祷寺院は、加持祈祷の法要によって成り立っている。それは当たり前のように日常儀礼として我々はつとめているが、明治という近代化の波の中にあつて、世間から冷たい視線を投げかけられた真言僧侶が、「祈祷」という実践行為の正当性を真剣に考えていたのかをあらためて見直す時、現代に生きる我々真言僧侶が、自ら行う祈祷の意義を再認識していかなければならないと考えさせられる。またそれによって、我々が過去の諸大徳が築いてきた伝統を現代に新たに蘇らせる契機ともなるであらう。

資料

〔新佛教〕二葉憲香監修『新佛教』論説集下巻 永田文昌堂 昭和五十五年十一月

〔俱舎論〕佐伯旭雅編『冠導阿毘達磨俱舎論Ⅱ』法蔵館 平成五年九月二刷

〔那須〕那須政隆「真言宗における加持祈祷の一考察」『那須政隆著作集第二巻 真言密教の哲学』法蔵館 一九九七年四月

〔宮坂〕宮坂宥勝「加持・祈祷・咒文の意味」『呪術・祈祷と現世利益』大法輪閣昭和五十八年九月

村上保壽氏の「空海の『開題』を読む(四)―加持の概念と加持祈祷―」(密教文化二〇八号二〇〇二年三月)

*本文以外で、この時期『六大新報』に掲載された主な執筆者。

松本文雄「祈祷私論」四六九号 大正元年九月二十二日 六〜七頁

伎人戒心談「祈祷に就いて」四七一号 大正元年十月六日四頁

融道玄「祈祷の疑問」四七一号 五頁

密門有範談「密宗祈祷論」四七二号 大正元年十月十三日三〜四頁

水野賢道「祈祷の疑問に就いて融君に質す」四七四号十月二十七日十四〜十五頁

蓬山紫堂「祈祷論に就いて」四八一号 大正元年十二月十五日四〜六頁

*『六大新報』については、六大新報社のホームページによれば、

「前身誌である『伝灯』第1号は、明治維新とともに燃え広がった廃仏毀釈の余燼まだ消えやらぬ明治二十三年一月二十一日、真言宗伝灯会の機関誌として世に出た。・・・明治三十六年『伝灯』は『六大新報』に改題。第二次世界大戦中の厳しい統制の中でも多くの誌紙が廃刊の憂き目に遭う中、本誌は特に京都府知事の要請により存続させられ、今年創刊一四四年の日本最古の宗教新聞となった。」

(<http://rokudashinpo.jp/company.php>)

*『新佛教』は、佛教清徒同志会の機関誌であり、明治三十三年七月に発刊され、大正四年八月、通巻第十六巻第八号まで発行された。

佛教清徒同志会については〔新佛教〕の末尾に赤松轍真が解説の中で次ぎのように説明している。「境野黄洋・田中治六・安藤弘・高島米峰・渡辺海旭・杉村縦横らによつて結成され・・・彼らは既成教団の腐敗や墮落と訣別し、仏教の再生をめざす覚悟を示すため『仏教清徒』と称した。」赤松轍真「解説 新佛教運動について」〔新佛教上巻一〜二二頁〕

この佛教清徒同志会の綱領の中に、「一、我徒は一切の迷妄の信念を排す」という一項がある。

〈キーワード〉加持祈祷、六大新報、引業、満業、三力、土宜

法龍、和田大圓